



隅田川木母寺略縁起

服部文庫
イ17
392



117
392

得四川本母寺略叙



隅田川本寺略縁起

隅田川本寺略縁起
梅若山権禪の権興行に奉るに豊後守國快將惟方卿と
少人並に村長金の執事初行して外衆國驛の二現住人村推
引し和漢の才人也と云ふ家よりあることと云ふて又瑞日と云
神の靈地と云ふ丹行村なるに六段菰藁の梅花の如く奇異と云ふと
多て懐疑し一ふゆきも梅に寒林の心を傳たうか如くして瑞日
感し名を梅若山と附與せし母夫法國師と云ふ長者の娘
にふきとて歳ふと一日歎くを父えをわたり時をもち事と云ふ
我より父のふきとては夢は何ぞ有るのふきとて人々も頗る感心し

隅田川本寺略縁起

と云ふと云ふ一統の廟心
と云ふと云ふの神童也

士氣の附放有て離れし北原の家に帰るに大津の浦から
安ん信まねるるといふ人高人歌きして言がけりて
て遠く東小將より母の兄族より病小羅郎徳武の境
河迄奔て去隅田川を渡り民をば見らに悲びず
同い地上の人の世も是れはあまたの地を夜中
我衛護も又幾時を一宵の和舟にたのみ
と詠しおのち佛號を録して終る貞元元年
十二月十一日
小倉にて無上菩提の作善とる遺徳は
一推の徳を

筑前樹は植ゑしとて一月の春里人事をなれ
忌日吊の母儀秋よりけしきなくも
孝徳もけしきなくもけしきなくも
世陽回りのるまれぬ一寒よりして新柳
あられなくもけしきなくもけしきなくも
かりの事なりしとて母儀の極は
とて柳にけしきなくもけしきなくも
てとて柳にけしきなくもけしきなくも
の同境よりけしきなくもけしきなくも
して幻乃客は現し明月よりけしきなくも
晴のちあたらけしきなくもけしきなくも

わし孰う是に何れに成る哉是を相と稱して天正十八年
我國家を梅柳山の號に授けり此は又慶長五年
東近衛前殿下信基を安んずるに由りて本母寺の額を
賜ふ慶安を曆に改めし初め是を梅柳山
照代の春に董として万歳の神位に擢る今經紀と因
看て都島にふるに感ず其大徳と筆して是國に懸
す故蹟の今に新なる事には都に先神位と稱え
照代澤度元々高麗に満じし年家小御して天直なるふ
會せんといふ希いと云ふ



